

渦、巻きおこすべし

—全道展の未来を占う—

荒 卷 義 雄

全道展の未来について、何か書け——、と編集部から依頼されたが柄にもないことで荷にあまった。

あれこれ適当な逃げ文句を書きつらね、体をかわそうと思ったが、嘘がつけない。あきらめて、日頃おもっていることを正直に書くことにした。

全道展は在野の学校

卒直にいうけれども、ぼくは他^{よき}処様の事柄に口をさしはさむよりも、自分の守備範囲でできることをさっさとやってしまった方が、手続きがはぶけて好きである。ま、この場合ぼくの守備範囲とは、札幌時計台文化会館の仕事のことだが、素人が何か始めたらしいと言われるうちに、絵描きさん方に教育されたせいか曲りなりにも5年たってしまった。実際に首をつっこむようになったのは3年半ぐらいだが、ぼくにとってこの期間は大変充実していたと思う。

殊に全道展の絵描きさん（彫刻その他も含めて）から学ぶことが多かった。この、いわば教え子みたいなぼくが、お師匠さんみたいな人の多い全道展について何か言うこと自体本当は筋違いだともいえる。

が、そういう意味で全道展は、在野の学校なのだということではできるのだ。我々市民サイドの者にとって、それはロハで学ぶことのできる一種の塾のようなものなのである。

利用できるものは利用しなければ損である。会場でこのカタログを読んでいる美術ファンの皆さんも、遠慮なく学んだ方がよいのである。わからないことはどしどし聴けばよい。芸術家という人種は大体において純情且つお人好しで、聴かれれば相手かまわず飲んで教えてくれるものだからだ。

というわけで、ぼくは、全道展の社会的意義はまず民間の大学である点だとおもう。事実、全道展が30年の歴史の

うちに果してきた社会的役割は大きいのだ。

世界のあちこちを実見して廻っているぼくの眼からみて、文化的に品格をもった都市の市民は美術的に教育されているから不思議だ。

ローマでのぼくの体験であるが、とある教会をスケッチしていたら、ありふれた格好の老人がやってきて、「やめろ」という。そして、傍らのガス燈のついた建物のこきたない壁を指さして「これを描きなさい」と身振りで教えてくれた。

で、ぼくは教示どおりに描いてみせたのである。

老人は嬉しそうにうなずいて、

「大変よい。お前は芸術家だ」

と、肩をたたくと去っていった。

パリでもおなじ経験をしたことがある。パリの市民は目が肥えている。無教養であるはずのその辺の連中が、ちゃんと鑑るべきところは鑑る美的教養をそなえているのだ。

つまり街ぐるみ良き批評家であるのがパリという都会なのではなかろうか。が、これは街自体が学校だからであって、彼らは自然に学んだにすぎないのである。

ところが日本などでは、「私は絵がわかりません」という人が、通常政治家だの経営者になっているのである。むろんわからないのにわかったふりをする人よりは正直で大変よろしいが、都市の品位というものは芸術的な豊さに比例していることに気づいて欲しいのだ。

たとえばぼくが一番好きな美術品の多い宋代のことを調べてみたら、あの時代の皇帝は大変な文化人であった。ウィーン、フィレンツ、ロンドン、パリその他、ヨーロッパの場合も例外ではない。

なのにだ、文化推進の担い手であるはずの新聞社だって、読者層が少ないという理由で美術欄の紙面にいささかひやかかではないか。

いいだしっぺから始めよ

が、「押してもだめ、引いてもだめ、だからあきらめよ」では、札幌をはじめとする道内の各都市は、容れ物だけ近代都市になっても中味がともなわない。

ではどうするか、中味は我々市民でつくるより仕方がないのである。

採算度外視の札幌時計台文化会館の仕事も「いいだしっぺからまず始めよ、の面子をかけての事業だけれども、全道展がこれまでやってきた仕事も同様であった。その点、ときどき公募展不必要論など耳にするけれども、それもよかろう。

が、全道展はやっぱりこれまでどおりでよいのである。

仮りに5百万道民の全部が全道展という名前を知ったとする。これだけで実に大きな社会教育的意義があるのだ。若し全道展の応募者が百分の一の5万人になったとする。百人に一人が絵を描きはじめたとすると、画材店ももうかるけれども、新聞社の経営者も各市の首長も美術を無視できなくなるだろう。

市長はあわてて美術館を建てるだろうし、美術館に入れる絵を買い蒐めるだろうし、良い絵をみる機会に恵まれた道民は、自然に教育されて高度の鑑賞力を身につけるだろう。

「風が吹けば、桶屋が……」の話ではないが、この原理は循環の妙を指摘したもので、誰かが何かを始めれば、自ずと他に波及していくものなのである。

だから、人に「やれやれ」とばかり言って何もしないよりは、何かを始めた方がいいのである。

その点、こういっては失礼だが、全道展は、その得にもならないことを卒先してやる梁山伯的馬鹿が多土濟々な

ではあるまいか。

一口に馬鹿といっても良いのと悪いのと二種類あるが、全道展の場合はむしろ良い馬鹿に属すと思う。こういうぼく自身もその馬鹿の一人だと思っているが、しかし本当の利口は、概して馬鹿なことでも平気でやれるのである。

ところが地方社会というところは、中途半端な利口者がいて、批判はするが何もやらない。その癖、人のやることに水をさし、出る釘の頭を叩いてばかりいるのである。

が、これはいけません。芸術家は植木屋さんでも大工さんでもないからである。

渦を巻き起せ

ぼくは、この梁山伯みたいな感じのする全道展が、会のまとまり工合など糞くらえで各人各様それぞれが勝手に何かやりだしたら、却ってそれが渦巻きを中心になって世の中に新しい波紋をまき起すと考えるのである。

地域社会は一種の池である。池の底にはおりが溜まっている。上澄みだけがきれいに見えるに過ぎない。

さてここで、誰かが棒切れをつっこんで池の底をかき廻すとする。小さな渦がおこるだろう。「これは面白そうだ、おれもやろう」と別な誰かもやる。そこであっちでもこっちでも皆が池の底をかきまわしはじめたら、池を管理する側にはかなりやり難い面もでてくるだろうが、その代り、事によれば池の底から大判小判がざくざく出てくるかも知れないのである。

社会は一種の水にたとえられている。人は水の分子というわけで、当然流体の力学がここに適用される。渦は周囲を巻きこみ、渦と渦は合体して次第に大きく成長しはじめるはずである。これは丁度台風の発生メカニズムと似ているわけだが、さて地域社会という池にまき返る渦巻きは、

やがて竜巻きとなって池外に飛び出すかも知れない。

が、要は、誰がはじめるか——だ。ところが、ぼくがこの今述べた渦巻理論は、実は全道展の内部から出された方法論なのである。

つまり、もう誰かが既に始めようとしていることなのだ。

作家精神を持つべし

いまぼくは、池から飛び出す渦のことを述べた。新しい芸術は統制された閉鎖集団からは生まれえないと思うからだ。偉い人が頂点にいて、年功序列型師弟縁故型のピラミッドを形成している体制からは生じえないのである。

伝統芸術といわれる歌舞伎、華道、茶道などの縦型集団とよく似た公募団体も中央などにはなくはないが、それはそれだ。この点全道展では中堅層に強じんな作家精神を持つ画家が数多くみられ、それぞれ自己主張しているところが面白い。またそれ故に可能性もある。

この場合、作家精神とはプロ意識である。プロはアマチュアリズムを超えたところにある。ありていにいうならば、アマチュアが年間十点描くとしたら、百点描くことのできる人間である。アマチュアの何十倍も絵筆や鑿をにぎっている人間のことである。

アマチュアが1日に2時間絵に時間をさくとき、24時間描き続けることを考える人間のことである。そんな芸術家がいる、ということ自体が、既に芸術家とはかくあらねばならぬことを社会に向って教えているのである。

技術を教えるのは教師である。だが、芸術の魂、作家の精神を教えるのは制作しつづける作家である。

全道展に、かような作家がいる限り、そして増えるならば、北海道の美術状況は必ず良くなる、とぼくは断言するのだ。
(札幌時計台文化会館理事)